

つうかあの仲の心理学的研究 — 対人関係の親密さおよび社会的スキルとの関連 —

栗 林 克 匡

目 次
問 題
方 法
結 果
考 察

問 題

長年つれそった夫婦の間では言葉で言わなくても、なんとなく相手が考えていることが分かるという。このような仲のこと「つうかあの仲」という。広辞苑(第5版)によると「つうかあ」とは、「つう」といえば「かあ」の約で、「お互いに気心が知れていて、ちょっと言うだけで相手にその内容が分かること。気持ちが通じ合って、仲のよいこと」とある。このようなことは、夫婦に限らず友達や恋人同士でも起こりうる。

この現象への心理学的アプローチとして、まず、大坊(1986, 1990)のコミュニケーションの直接性(発言量や接触などの活発さ)の逆J字仮説を挙げることができよう。この仮説では、関係の安定期においては双方の理解は達せられており、直接性を高める必要性が低下してくるという(図1参照)。

夫婦関係におけるコミュニケーションの特徴を検討した研究が、この仮説を導いている。例えばNoller(1980)は夫婦の適応度と視線の関係を検討し、適応度の低い夫婦ほど話しながら相手(配偶者)に向ける視線が多いことを見いだしている。これは逆に言うと適応度の高い夫婦は相手を見つめることなしにコ

ミュニケーションできるとも受け取れる結果である。また、夫婦の場合は恋人同士に比べ沈黙が多く、発言の重複が少ない(Shaw & Sadler, 1965)が、このことは発言によって親密さを高め得る範囲を超え、意図的な働きかけを要しない程度の親密さがすでにあるため、言語的働きかけを活性化させないからと考えられる。夫婦関係には他の人間関係と異なる側面があるといえるだろう。國分(1980)は結婚と恋愛との相違点として以下の4点を挙げている。第1に、結婚はお互いに役割を遂行するという契約であり、自分の権利と義務を常に意識しなくてはならない(意識性)。第2に、恋愛は「ふる・ふられる」可能性が前提にある不安定な人間関係であるのに対し、結婚はお互いに一生を共にしようと約束していて、別離の可能性は前提にしていけない(責任性)。第3に、恋愛は現実世界から脱出した自由奔放さを必要とするが、結婚は「俗事」に精励しなければならない極めて現実的な営みである(現実性)。第4に、恋

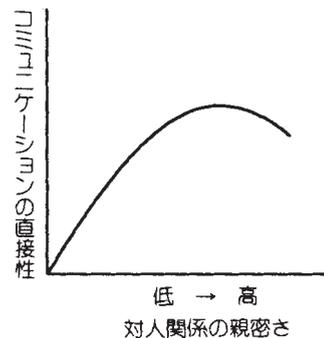


図1 コミュニケーションの直接性と親密さとの関係(大坊, 1986)

愛の場合は好きな者二人が他者と隔離した世界に留まっても非難はされないが、結婚は夫婦二人だけで楽しく過ごせばよいというものではない。結婚は、特定の一人を選ぶことによって多数の人間との関わり合いを持つ人間関係である（社会性）。このような夫婦関係がもつ意識性や責任性、現実性、社会性が夫婦特有のコミュニケーションの背景にある。

本研究では、夫婦、異性、同性関係という相手のとの関係性によってつうかあのあり方が違うのかをまず調べ、そして相手との親密さの高まりに伴い、つうかあの程度がどのように変化するのかも検討していく。なお本研究では親密さの指標として Berscheid, Snyder, & Omoto (1989) によって作成された RCI (Relationship Closeness Inventory) を用いる。この指標は、Kelley ら (1983) の相互依存性の考えに基づき、親密さを 1. お互いに影響を及ぼし合う頻度 (frequency), 2. お互いに及ぼしあう影響の強さ (strength), 3. 二人で行う行動の多様性 (diversity), 4. 二人の間で上記の三つの行動が続いている長さ (duration) の、4つの具体的な行動特性から捉えようとするものである。つうかあは、発言量や接触などの直接的コミュニケーションと異なり、親密さの高まりに比例し上昇し続けると思われる。

つうかあの仲に対する別のアプローチとして、社会的スキルを挙げることもできよう。社会的スキルとは「円滑な対人関係を実現するために用いられる熟練した認知や行動の集合体」である (栗林, 2002)。堀毛 (1991) によると、社会的スキルは「表に現れた行動」「中範囲の能力概念」「高次の抽象過程」の3つのレベルに分類できるが (Spitzberg & Cupach, 1989), 第1のレベルの「行動」は、様々な社会的場面を円滑かつ正常に処理し、課題解決や目標達成につながる行動を意味するとしている。ここに着目した堀毛 (1994)

は「記号化」「解読」「統制」の3つの基本スキル因子を測定する尺度 (ENDE 2) を作成している。本研究では、この中でも特に「解読」と「記号化」スキルに注目する。解読の高い人は、他者の表出行動から他者の感情や態度などを判断することに長けている。また記号化の高い人は、自分の感情・態度などを、様々なチャンネルを通じて外部に表出することに長けている (堀毛, 1991)。また本研究では、もう一つの社会的スキルとして非言語的表出性を取り上げる。この非言語的表出性を測定する目的で Friedman ら (1980) は ACT (Affective Communication Test) という尺度を作成した。ACT は社会的な積極性や情動の送信能力などとの関係が強い。この尺度は大坊 (1991) により日本語版が作成されている。つうかあの仲においては、相手の表情、視線、身振りなどの非言語的行動に対して敏感に反応し、そこから相手の気分、感情を「解読」する能力や、特定の相手にだけ分かるように知らせる「表出」の能力が必要と思われる。

以上のことから、「つうかあの仲」を検討する上で、2者間の親密さと社会的スキルの要因は重要であると考えられる。そこで本研究では、「つうかあの仲」を測定する尺度の作成、関係の親密さおよび社会的スキルとつうかあとの関係を調べることを目的とする。

方 法

被調査者：大学生199名（男性51名，女性148名：平均年齢20.19歳）及び夫婦56名（男性28名，女性28名：平均年齢45.22歳）。夫婦は、被調査者となった大学生の両親と社会人学生で結婚している者であった。大学生のうち、同性友人について回答した者は113名（男性22名，女性91名）で、異性友人について回答した者は86名（男性29名，女性57名）であった。

質問紙の構成：

関係の種類：異性友人の有無を尋ねた。異性友人のいる場合はその異性、いない場合は同性の友人を1人思い浮かべ、以下のRCIおよびつうかあ尺度に回答させた。なお具体的な相手との関係に「結婚相手」を挙げた者は夫婦とみなした。

親密さの指標：久保（1993）の日本語版RCIを用いた。a) 交際期間, b) 接触頻度(会う頻度と電話の頻度), c) 1回あたりの接触時間(会う時間と電話の時間), d) 行動の多様性(行動17項目と会話の内容14項目について相手との間でなされたものをつける), e) 関係の強さ(被調査者の生活および考え方において相手から受ける影響力を7段階で評定), f) 心的疲労感(相手との会話でどの程度疲れるかを7段階で回答)について評定を求めた。

つうかあ尺度：つうかあ尺度作成にあたり事前に大学生28名(男性4名, 女性24名)に予備調査を行った。そこで過去に経験したつうかあ場面の自由記述と、その「つうかあ

を感じた相手との関係及び交際期間を回答させた。その結果、約100場面が得られたが、交際内容別(相手:異性-交際:長期(1760日以上), 異性-短期(730日以下), 同性-長期, 同性-短期)に、それぞれ頻度の高い5~6場面を選出し、23のつうかあ場面を決定した。評定は23場面それぞれについて、交際相手との間にどの程度起こるかという頻度を「1:全くない」~「5:非常によくある」の5段階で尋ねた。

社会的スキル：大坊（1991）のACT(13項目9段階)と、堀毛（1994）のENDE2(15項目5段階)を用いた。なおENDE2は、記号化スキル、解読スキルなどの因子から構成される。

結果

つうかあ尺度の因子分析

つうかあ尺度について、主成分解バリマックス回転の因子分析を行った。固有値の推移を考慮して4因子を抽出した(表1参照)。

表1 つうかあ尺度の因子分析結果

					h ²
14. 言葉に詰まった時に、何を言いたいのかわかってくれた	0.77	0.07	0.21	0.11	0.65
8. 目で合図したら相手もそれに応えてくれた	0.65	0.23	0.14	0.28	0.57
15. 「あのさあ」と切り出しただけで話の内容を分かってもらえた	0.65	0.05	0.41	0.14	0.61
11. 機嫌の悪さや悩み事をちゃんと察してくれた	0.63	0.50	0.03	-0.01	0.64
6. 言いたくても言えないことを表情だけで察してくれた	0.62	0.43	0.00	0.16	0.60
13. 話をしていて私が決断を迫ると、私が1番望む答えを出してくれた	0.61	0.29	0.16	0.22	0.53
12. 必要なものを何も言わずに用意してくれた	0.60	0.18	0.40	0.11	0.56
9. 「あれ」で話が通じた	0.54	0.05	0.11	0.28	0.38
23. ふれてほしくないとき、口を出さないでくれた	0.53	0.32	0.19	-0.28	0.49
7. 品物を選ぶときに、自分の好みに合うものを選んでくれた	0.49	0.11	0.37	0.40	0.54
5. 会いたいと思っていたら会いに来てくれた	0.08	0.66	0.28	0.17	0.55
4. 電話をかけようと思っていたら相手からかかってきた	0.03	0.64	0.21	0.24	0.51
22. 荷物が多いとき、何も言わなくても手伝ってくれた	0.21	0.56	0.15	0.05	0.38
3. 本心を隠して話をしていたら、ずばり本音を言い当てられた	0.25	0.55	0.00	0.21	0.40
20. 落ち込んでいたときに、何も言わなくても「元気ないね」といつてくれた	0.33	0.52	0.28	-0.01	0.46
21. 同じ物を買ってきた	0.06	0.16	0.66	0.08	0.47
18. 遊びに行こうと言って、相手と行きたい場所が同じだった	0.18	0.17	0.65	0.36	0.62
17. しばらく会っていない間に興味を持ったことが同じだった	0.25	0.08	0.63	0.16	0.49
19. 待ち合わせのときに「いつもの場所」で通じた	0.16	0.37	0.53	-0.05	0.45
10. 自分が喉が渇いたと思っていたら「何か飲もうか」といつてくれた	0.35	0.31	0.50	0.19	0.50
2. 何かを食べようとして食べたいものが同じだった	0.10	0.16	0.15	0.78	0.66
1. 同じ物を見て同じ事を思った	0.25	0.28	0.11	0.65	0.58
16. テレビを見ていて、あるシーンで同じ反応(笑う、泣くなど)をした	0.22	0.08	0.35	0.46	0.39
固有値	4.32	2.86	2.77	2.10	
寄与率(%)	18.78	12.43	12.04	9.13	

表2 つうかあ4因子について性別および関係別の平均値及びF値

		男性			女性			性別の 主効果	関係の 主効果	性別×関係 交互作用
		同性	異性	夫婦	同性	異性	夫婦			
察	知	2.48 (0.74)	2.82 (0.78)	3.46 (0.71)	3.09 (0.68)	2.93 (0.68)	2.93 (0.73)	1.39	3.23*	9.52***
施	与	2.19 (0.74)	2.88 (0.92)	2.81 (0.76)	2.74 (0.60)	3.22 (0.66)	2.92 (0.76)	12.72***	13.73***	1.50
好	みの一致	2.42 (0.94)	2.56 (0.81)	2.72 (0.63)	2.82 (0.74)	2.58 (0.64)	2.66 (0.70)	1.72	1.12	1.78
思	考の同調	2.97 (0.54)	3.10 (0.70)	3.39 (0.54)	3.23 (0.70)	3.19 (0.67)	3.37 (0.66)	1.66	2.64	0.77

()内はSD

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

各因子への負荷量が.45以上で、かつ複数の因子に同時に負荷していない項目を採用し(項目11は削除)、因子ごとに平均した得点を求めた。第1因子は、「言葉に詰まった時に、何を言いたいのかわかってくれた」「目で合図したら相手もそれに答えてくれた」など9項目からなり、これは相手が自分を察知することに関係するものなので「察知」と命名した。第2因子は、「会いたいと思ったら会いに来てくれた」「電話をかけようと思っていたら相手からかかってきた」など5項目で、これらは相手が自分の望むことを自分が相手に要求する前にしてくれるようなことなので「施与」と命名した。第3因子は「同じものを買ってきた」「しばらく会っていない間に興味を持ったことが同じだった」など5項目で広い意味での好みや趣味・関心の類似に関する項目であることから「好みの一致」と名付けた。第4因子は、「何かを食べようとして食べたいものが同じだった」「同じ物を見て同じ事を思った」などある状況下で瞬間的な同調に関する3項目からなり「思考の同調」と名付けた。なお、4因子の係数は順に.87, .71, .74, .64であった。

性別および関係の種類とつうかあとの関係

つうかあ4因子について、性別×関係の種類(同性・異性・夫婦)の2要因の分散分析を行った。多重比較にはダンカン法を用いた。

性別および関係別の平均値とF値は表2に示した。まず「察知」因子において、関係の主効果が有意で、異性(2.89)や同性(2.97)よりも夫婦(3.19)の察知が高かった。また性別×関係の交互作用が有意であり、女性では関係による差はないが、男性では夫婦で特に察知が高かった(図2参照)。次に、「施与」因子では性別の主効果が見られ、男性(2.66)よりも女性(2.93)の方が得点が高かった。また関係の主効果も有意で、同性(2.63)よりも夫婦(2.87)や異性関係(3.11)の方が得点が高かった。「好みの一致」「思考の同調」因子では、いずれも主効果、交互作用ともに有意な結果が得られなかった。

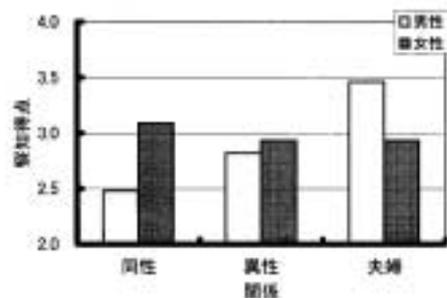


図2 性別および関係が「察知」に及ぼす影響

親密さの指標(RCI)の主成分分析

主成分分析を行う前に、久保(1993)の手続きを参考に、交際期間(日)、接触頻度(回数/月)、接触時間(分/回)、多様性については7段階尺度へ変換することにした。

まず各項目値を平方根変換し度数分布を求め、累積割合93%を超える値を基準値とした。そして基準値以上を尺度値7に、あとは0から基準値までを6段階に分けた。なお、接触頻度は会う頻度と電話の頻度を足して2で割った値、接触時間は1回あたりの会う時間と電話する時間を足して2で割った値、多様性は行動と会話内容を足して2で割った値、関係の強さは生活への影響と考え方への影響を足して2で割った値を分析に用いた。

交際期間、接触頻度、接触時間、行動の多様性、関係の強さ、心的疲労感の6変数を要約するために主成分分析を行った。固有値1.0以上の主成分を選択した結果、2成分が得られた(表3参照)。第1成分は、接触頻度、接触時間、多様性、関係の強さが正の高い負荷を示し、交際期間と心的疲労度が負の負荷を示していることから、現在進行中の交際関係を表すと思われる。そこで「現在進行成分」と命名した。第2成分は、交際期間と関係の強さが正の高い負荷を示し、接触時間は負の負荷を示していることから、普段はそれほど接触していないが、つきあいは長く相手からの影響をかなり受けていることから旧友的な関係を示すと思われる。そこで「安定成分」と命名した。2つの親密さの得点は、各主成分得点を用いた。

つかあとの親密さの相関

つかあ4因子と親密さ2成分との相関係数を求めたところ、「現在進行」および「安定」的な交友が高いほど、つかあであるという正の相関が見られた。「現在進行」成分

表3 親密さ(RCI)の主成分分析結果

親密さの指標	第1主成分	第2主成分
交際期間	-0.22	0.76
接触頻度	0.42	0.07
接触時間	0.45	-0.40
行動の多様性	0.53	0.19
関係の強さ	0.45	0.47
心的疲労感	-0.30	-0.02
固有値	2.14	1.20

では「施与」をはじめ全てのつかあ因子で0.1%水準で有意であった。「安定」成分では「察知」「思考の同調」の相関がやや高いようである(表4参照)。いずれにしても、親密さの進行に比例し、直線的につかあとの経験も増加していると言える。

つかあとの社会的スキルの相関

つかあ4因子と ENDE 2, ACT との相関係数を求めた。解読スキルでは、全てのつかあ因子との間に有意な正の相関が見られた。記号化スキルでは、「施与」「思考の同調」で有意な正の相関が見られた。ACTでは、「察知」を除く3因子との正の相関が有意であった。(表4参照)。

ここで ENDE 2 と ACT について性別 × 関係の種類 の 2 要因の分散分析の結果を示しておく(平均値とF値は表5参照)。記号化スキルや ACT といった表出系スキルは女性の方が得点が高かった。関係性の主効果は解読、記号化スキルともに有意差がなく、ACTでは夫婦(51.96) < 同性(58.35) < 異性(63.95)と有意差があった。夫婦の非言語的表出性は意外と低いものであった。

表4 つかあ因子と親密さおよび社会的スキルとの相関係数

	親密さ		社会的スキル		
	現在進行	安定	解読スキル	記号化スキル	ACT
察知	.27***	.23***	.16*	.11	.08
施与	.49***	.16*	.21***	.19**	.18**
好みの一致	.28***	.13*	.15*	.08	.19**
思考の同調	.33***	.21***	.16**	.14*	.13*

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表5 社会的スキルについて性別および関係別の平均値及びF値

	男性			女性			性別の 主効果	関係の 主効果	性別×関係 交互作用
	同性	異性	夫婦	同性	異性	夫婦			
解読スキル	16.57 (3.06)	17.97 (3.27)	18.04 (2.05)	17.75 (2.95)	17.21 (3.65)	18.33 (2.54)	0.20	1.18	1.82
記号化スキル	12.95 (2.42)	13.32 (2.54)	12.50 (2.66)	13.65 (2.75)	14.25 (3.08)	13.61 (2.48)	5.32*	1.48	0.09
ACT	50.95 (16.71)	60.64 (13.46)	50.18 (10.87)	60.10 (14.75)	65.64 (15.56)	53.88 (11.23)	8.90**	10.19***	0.63

()内はSD

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

考 察

本研究では、「つうかあの仲」を測定する尺度を作成し、関係の親密さや社会的スキルとの関係を検討した。まずつうかあ尺度の因子分析の結果から、つうかあにも「察知」「施与」「好みの一致」「思考の同調」といったいくつかのタイプがあることが分かった。それらの中でも大きな部分を占めるのが「察知」であり、これはつうかあを捉える上では重要なものと考えられる。

つうかあ4因子について性別×関係の分散分析の結果から、まず「察知」については、夫婦で高いことが分かった。特に男性は相手からの察知をよく経験していた。つまり妻が夫の気持ちを察知していることになる。夫婦におけるつうかあは、夫の"つう"に妻が"かあ"と答えるパターンがやはり多いと思われる。「施与」に関しては、女性に経験が多く、異性関係や夫婦でよく経験されている。この結果の背景には、男性から女性への施しの多さと、男性から男性への施しの少なさが伺える。異性関係や夫婦では、相手との関係を維持し、相手にとって自分が特別な存在であることを証明するために、この施しといった行動が必要なかもしれない。「好みの一致」は、どの関係でもやや低い値であり、関係の種類には影響を受けないと思われる。「思考の同調」はどの関係でもよく起こっており、つうかあの中でも日常的なものといえよう。各関係においてどのつうかあを経験しやすい

かをまとめてみると、夫婦では「察知」が、異性関係では「施与」が、同性関係では（異性・夫婦と同レベルだが）「思考の同調」が特徴的であり、関係によってよく経験するつうかあのタイプが違うといえよう。

親密さとつうかあとの関係から、まず長い交際期間を経て接触はそれほど多くはないが旧知の仲である「安定」した交友が高まれば、つうかあの程度も高くなっている。まだ交際期間はそれほど長くはないが、諸側面において影響の大きい「現在進行」中の交友でもつうかあは起こっている。このことから、単に「交際期間が長い」ということがつうかあにとって重要というわけではないようである。

つうかあと社会的スキルの間に有意な正の相関がいくつか見られた。特に被調査者の解読スキルが高いほど、相手との関係の中でつうかあを感じ取れているようである。また記号化や非言語的表出性の高さは、相手からの「施与」や「思考の同調」を誘発する効果があるといえよう。ただし統計的には有意な相関であるものの、相関係数自体はそれほど高い値ではない。この点に加え、今回の結果では夫婦は一般的な表出スキルや解読スキルは決して高いものではなかった。にもかかわらず、「察知」や「施与」といったつうかあの経験は他の関係よりも多かった。Sabatelliら(1982)は、夫婦は他人よりも自分の配偶者の表出行動を正確に解読でき、特に記号化のうまい妻の夫は結婚生活についての不平不満が少なく安定していることを見いだしている。

この知見は夫婦などある特定の関係内ならではの現象といえよう。これらのことから、つうかあという現象は一般の社会的スキルとは異質な側面も持っていることが伺える。まず第1に限定性である。社会的スキルの場合は不特定多数の他者との円滑な相互作用のため能力を扱うが、つうかあの場合はある特定の2者関係において限定的に生じるものである。第2に共有性である。社会的スキルでは、ある個人内の「解読」「記号化」などの能力を問題にすることが多いが、つうかあは特定の2者間で共有される能力・事象に言及している。

このことから今後の課題としては、個々人の回答だけに注目するのではなく、カップルのデータを収集し、相互のつうかあの認識などについて検討する必要があるといえよう。

[引用文献]

- Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A.M. 1989 The relationship closeness inventory : Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 792-807.
- 大坊郁夫 1986 対人行動としてのコミュニケーション 対人行動学研究会 (編) 対人行動の心理学 誠信書房, Pp. 193-224.
- 大坊郁夫 1990 対人関係における親密さの表現 - コミュニケーションに見る発展と崩壊 - 心理学評論, 33, 322-352.
- 大坊郁夫 1991 非言語的表出性の測定 - ACT 尺度の構成 - 北星学園大学文学部北星論集, 28, 1-12.
- Friedman, H. S., Prince, L. M., Riggio, R. E., & DiMatteo, M. R. 1980 Understanding and assessing nonverbal expressiveness : The affective communication test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 333-351.
- 堀毛一也 1991 社会的スキルとしての思いやり 現代のエスプリ, 291, 150-160.
- 堀毛一也 1994 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34, 116-128.
- Kelly, H. H., Berscheid, E., Christensen, A., Harvey, J. H., Huston, T. L., Levinger, G., McClintock, E., Peplau, L. A., & Peterson, D. R. 1983 *Close relationships*. New York : Freeman.
- 國分康孝 1980 結婚の心理 福村出版
- 久保真人 1993 行動特性から見た関係の親密さ - RCIの妥当性と限界 - 実験社会心理学研究, 33, 1-10.
- 栗林克匡 2002 ソーシャル・スキルとトレーニング 津村俊充 (編) 子どもの対人関係能力を育てる 教育開発研究所, Pp. 144-147.
- Noller, P. 1980 Misunderstandings in marital communication: a study of couple's nonverbal communication. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 1135-1148.
- Sabatelli, R. M., Buck, R., & Dreyer, A. 1982 Nonverbal communication accuracy in married couples: relationship with marital complaints. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 1088-1097.
- Shaw, M. E., & Sadler, O. W. 1965 Interaction patterns in heterosexual dyads varying in degree of intimacy. *Journal of Social Psychology*, 66, 345-351.

[謝辞]

本研究の実施にあたり岡サヤカ氏の協力を得ました。記して感謝いたします。

[Abstract]

A Psychological Study of *Tu-Ka* : The Relationship between *Tu-Ka* and Intimacy or Social Skills

Yoshimasa KURIBAYASHI

The Japanese word *Tu-Ka* describes a state where people are in perfect understanding without apparent verbal communication. The purpose of this study was to develop a *Tu-Ka* scale and examine the relationship between *Tu-Ka* and intimacy or social skills. The participants were 199 undergraduates (51 males, 148 females) and 56 married couples (28 males, 28 females). They were asked about relationship closeness, degree of *Tu-Ka*, and social skills. The results were as follows. Four dimensions of *Tu-Ka* were identified as a result of factor analysis: sensitivity, generosity, common preferences, and synchronous thinking. The married couples often experienced sensitivity type of *Tu-Ka*, while undergraduate heterosexual couples experienced generosity type of *Tu-Ka* with their friends of the opposite sex. The degree of *Tu-Ka* was in direct proportion to interpersonal closeness. The *Tu-Ka* was relative to social skills, but the correlation was not so high. This implies that the *Tu-Ka* has different aspects from social skills.